書　評・紹　介

浜野　潔

『歴史人口学で読む江戸日本』（歴史文化ライブラリー 324）

吉川弘文館，2011年，203ページ

歴史人口学は近代的な人口統計制度ができる以前の時代の人口について研究する学問分野であり，現代の人口を扱う一般の人口研究者（評者もその一人）からみると，いささか特殊な分野でなじみにくいという思いがある．しかしすべての人口現象は，人類が地球上に出現して以来，現在まで（さらに未来に向かって）つながった一続きの過程として理解すべきであり，過去の人口についての研究が欠かせないことはいうまでもない．しかも著者によれば，広い意味の「人口史」（population history）に対して，「歴史人口学」（historical demography）はとりわけ家族の中で起こるさまざまな人口学的事象，すなわち出産，結婚，死亡，移動といった個人のライフコースを明らかにする新しい研究分野であるという．歴史人口学者の手になる本書は，江戸時代の日本に関する歴史人口学の今日までの成果をまとめたものであり，歴史人口学とはどのような学問なのか，江戸時代はどのような時代であったのか，分かりやすく語っている．

はじめに歴史人口学独特の方法として，フランスのルイ・アンリが発明した「家族復元法」のことが述べられている．日本の場合，宗門改帳から家族・世帯に関する人口学的行動の履歴が長期にわたって復元されるわけであるが，まずはそのデータベース化という気の遠くなるような作業に敬意を表したい．美濃国西条村の宗門改帳は1773年から1869年まで97年間にわたり，また陸奥国二本松藩の仁井田村と下守屋村には18世紀前半から幕末にかけておよそ150年続く人別改帳が残されているという．現代のパネル調査がせいぜい数年とか十数年の蓄積しかないことを思えば，破格の長い年月であり，しかもこのような歴史的データに対してイベント・ヒストリー分析という先端的な研究方法が用いられているのは驚異的なことである．さらに著者らは「ユーラシア人口・家族史プロジェクト」というヨーロッパとアジアの５カ国に関する共同研究により，国際的視点から比較研究を行っており高い評価を得ている．

こうした研究成果に基づき，本書は，出生率と死亡率，都市と農村，東日本と西日本，農民と武士といった対比により江戸時代の人口と社会・経済のありさまを描いている．都市では，特に著者が取り組んでいる京都についての研究成果が詳しく述べられている．また記録が残っている最後の幕府による全国人口調査（1846年）から明治新政府による最初の全国人口調査（1872年の「壬申戸籍」の集計）までの「空白の四半世紀」を日本の人口が停滞から増加へと大きな転換をした重要な時期と捉え，地域人口や経済の変化に着目する見方には，日本の「人口転換」がいつ，どのようにして起こったのかという大問題が直結しており，とりわけ興味をそそられた．ここで内容を詳細に紹介する紙数はないが，どのテーマをとっても現代に生きる我々にとって興味は尽きない．歴史物といえば，名を残した有名な人物がクローズアップされるのが常であるが，著者によれば歴史人口学とは「歴史に名を残さなかった」人びとがどのように生きたのかを明らかにする学問分野であり，本書によって，まさにそのような実感を抱くものである．

最後に，本書を一読して改めて感じたことは，歴史人口学は資料収集や読み取りの難しさから，やや取っ付きにくい感はあるものの，その考え方や分析方法はオーソドックスな人口研究に沿っているということである．むしろ現代人口に関する研究の方が，あまりにも細部にとらわれすぎているという傾向はないだろうか．その意味も込めて，本書は歴史人口学のみならず，人口学に関心を抱くすべての人に推薦したい本である．

（佐藤龍三郎）